

十二月に入り、天気予報の画面に雪マークが映し出された。ここまできれば、もういつ降り出したとて驚くに値しない。果たしてこの冬はどうなるか。昨年の市街は、まるで関東並みで、拍子抜けすると共に、い分と助かりもしたものだ。長岡までの通勤に加茂駅から電車を利用して、ポツンポツンとひとつづつ空いていく。この時期、着膨れした先客で座り、車内を素早く見回し、出来るだけ細目の人を見つけることにしている。だが、失敗もあつた。その人が二つ先の東三条駅で降りて、替わりにお相撲さんのような人に座られたときだ。防寒服でさらに膨れていまでも、重苦しい。着ているコートは、電車の響きを感じながら、コートの重さで、秋の一次的に寒い雨模様となつた日のことを思い出した。犬との散歩に出かけようとしたときのことである。納戸に吊るされていた散歩用のアノラック

を着た。暑苦しいのは当然だが、とても着ていられるものではなかつた。実に重い、両肩にずつしりと重さが伝わってくるのだ。ツクを着ても、重さが感じられない。身体に違和感が無い。物自体の重量に変わりはないはず。自身の体験した感覚の違いはまだある。背広もそうだ。洋服店で夏に秋冬用の上着を試着したときに感じた。また、時間の進み具合が、実際に早く感じられるときと、遅く感じられるときがある。面白いドラマだと、いつの間にか時間が過ぎてしまふし、楽しいイベントが待ち遠しいと開催日までが実に長く感じる。逆に納期仕事で追われていると、あつという間に締日がきてしまふ。一定で固定しているはずのものが、不定、変動したように感じるのは、身体のどこかで、何らかの指令が出ているのだろう。不思議なものだ。見附駅に着くと、多数の通勤通学客が乗り込んできた。一段落した頃、後ろの席から、仕事納めはいつかとか、年末年始はどう過

ごすのかなどの話し声が聞こえた。年末のどこにもある話だ。間もなく、新しい年がやってくる。十二月は一年の締めくくりの月であり、新しい年を迎える準備月でもある。今年も僅かになったのだ。一枚一枚剥がされ、すっかり薄くなった日めくりカレンダーが頭をよぎった。止め金に切り残された部分だけがやけに厚い。そして、最期の一枚がはがされた時、また一つ歳を重ねることになる。こればかりは気のせいではなく真実である。正月：「もういくつ寝るとお正月：」子供の頃この歌を聴くと心が躍った。正月そのものに変わりはないのに、今は自分に言い聞かせるようにして、新しい年を迎えている。夢を削りながら、年老いてゆくことに気がついた時：「歌いだしである。谷村新司の、「陽はまた昇る」の歌いだしである。未来に様々な夢や希望を抱いた。だが、成長と共に、その一つひとつが遠のいてきたのが現実だ。まさに夢は削り取られてゆくのである。」

しかし、この歌の良いところは、
「：：生きてるとは燃えながら暮らすこと：」とあることだ。
同じ太陽にも、沈む夕陽があれば、昇る朝陽もある。間もなく今年の役目を終える日めくりカレンダーも、次なる年のカレンダーを待機させている。夜が明けて真新しい表紙を剥がせば、日の丸が印刷された清々しい元日となる。

電車が大きく揺れ、車内アナンスが長岡：「と告げると、向かいの女性が顔を上げた。おしゃれに巻いた襟元の白いマフラーが冬をもの語っていた。
三十五分の乗車時間は、それこそあつという間であつた。」